

【研究ノート】

『都新聞』に登場した寄席案内

—明治・東京人の楽しみ—

風間道夫

KAZAMA, Michio

キーワード：東京新聞；色物；落語；義太夫；浪花節；新宿末廣亭

Received: 2015.11.22

1. はじめに

現在、我々が日々手にする新聞の原型は、明治の初期に生まれた数々の新聞だと考えられる。知識階級を対象に政治的主張を前面に出し、これを論じる新聞があった一方で、市井の出来事を分かりやすく書き、読み物と併せて読者に提供した新聞もあった。明治の半ばにうぶ声を上げ、人々に親しまれた『都新聞』もその一つであった。現在の『東京新聞』の前身である。

山本武利の「近代日本の新聞読者層」によれば、『都新聞』は、明治17(1884)年『今日新聞』(こんにちしんぶん)の名で夕刊紙として創刊、その後朝刊紙に切りかえ、明治21(1888)年に『みやこ新聞』へ改題、さらに明治22(1889)年に『都新聞』と名を改めた。東京下町の歓楽街を中心に固定読者を持ち、販売収入、広告収入も安定していた。紙面は花柳界情報だけでなく、劇評、小説などにも特色を出し、経済、商況記事にも力を入れた。山本武利は「『都』には商業に従事し、ときには花街にも通うかなり経済的に余裕のある商人読者が多かった。金と色を愛するかれらの心情にもっともマッチするのが『都』であったといえる。かれらは大所高所の論説よりも、下町情緒にあふれた記事を愛読していた」¹⁾という。

ここでは明治の東京人の楽しみであった寄席と、新しいメディアとして登場した新聞の結びつきを見ることにする。

2. 江戸から明治へ—寄席の拡がり

上方落語の第一人者であった桂米朝が「落語と私」の中で書いている。

「江戸の落語には、風流人の楽しみと言ったような要素がむかしから濃厚にあります。それは俳諧、狂歌、川柳と言ったものと通じ合いますし、芝居や音曲を好む、文人や茶人の趣味とも一致しています。」²⁾

「明治期にはいつて、落語という芸は東西ともに最盛期をむかえ、寄席も良いのができるし、演芸界全体が大発展をとげました。当時の代表的な娯楽であった歌舞伎は、だいた

いが大層な手間のかかるものですし、観客側としても準備のいるような性質のものであるのに対し、寄席はいたって手軽で、笑いを中心としただれにでも楽しめるものでしたから、はやったのも当然です。」³⁾

また、小木新造は「東京庶民生活史研究」の中で、三代目柳家小さんの聞き書きにある話から、「幕末維新の混乱で、東京の寄席ではその生活が成り立たないほどに落ち込み、芝居についてドサまわりに出た。それが年とともにようやく回復のきざしをみせて、明治3年から9年にかけて増加をみた」と解釈できる。」⁴⁾と書いている。

3. 寄席広告の登場

『都新聞』では、明治42(1909)年4月1日から寄席案内が広告として、寄席文字で書かれた小さな「寄席」のカットを付けて掲載が始まっている。カットには、「本欄は毎月上席二回下席二回掲載、ご希望の方は銀座1-3 三成社までお申込み下さい」との記述もある。この三成社が広告会社として「寄席」広告の取りまとめを行っていたのだろう。

この最初の掲載となった4月1日付けの寄席案内広告欄は、色物の部(落語、歌・踊り、手品など)、義太夫の部、浪花節の部の3つに分類されている。

- ・明治42(1909)年4月1日は色物の部7軒(両国・立花家、銀座・金澤亭、芝南佐久間町・恵知十、芝兼房町・玉の井、神田神保町・川竹亭、神田通新石町・立花亭、神田連雀町・白梅亭)、義太夫の部1軒(芝琴平町・琴平亭)、浪花節の部2軒(京橋銀座・銀座亭、京橋伝馬町・東京亭)の掲載があり、この広告では、色物、義太夫、浪花節が分類されている
- ・明治42(1909)年6月1日は色物の部11軒、義太夫の部4軒、浪花節の部3軒の掲載
- ・明治42(1909)年6月16日は寄席案内18軒が掲載されていたが、この時以降、色物、義太夫、浪花節の分類がなくなっている
- ・明治43(1910)年1月2日は寄席案内19軒
- ・明治43(1910)年1月16日は寄席案内16軒
- ・明治43(1910)年6月16日は寄席案内17軒
- ・明治44(1911)年1月1日は寄席案内19軒
(明治44年1月の寄席案内は、芝兼房町・玉の井、牛込神楽阪上・神市場、神田神保町・川竹亭、両国・二州亭、京橋区中橋・祇園亭、四谷・喜よし、日本橋馬喰町・常盤亭、小石川区・扇亭、下谷竹町・久本亭、日本橋区・伊せ本、銀座・金澤亭、神田美土代町・市場亭、神田和泉町・和泉座、芝南佐久間町・恵知十、日本橋葺屋町・大ろじ亭、両国・立花家、神田五軒町・廣市場亭、芝神谷町・勇多加亭、下澁谷・澁谷亭)
- ・明治44(1911)年6月1日は寄席案内10軒
- ・明治45(1912)年2月1日は寄席案内16軒
- ・明治45(1912)年3月1日は寄席案内20軒
- ・明治45(1912)年4月1日は寄席案内24軒
- ・明治45(1912)年6月1日は寄席案内25軒

(明治45年6月の寄席案内は、神田美土代町・市場亭、日本橋瀬戸物町・伊勢本、神田・白梅亭、両国・二州亭、馬喰町・常盤亭、花川戸町・東橋亭、深川高橋・常盤亭、京橋銀座・金澤亭、神田表神保町・川竹亭、牛込神楽町・神市場、神田須田町際・立花亭、両国・立花亭、神田五軒町・並木亭、小石川表町・演藝館、芝琴平町・琴平亭、麴町元園町・青柳亭、京橋銀座・銀座、京橋中ばし・祇園亭、日本橋・木原亭、四谷麴町十三丁目・喜よし、新橋・演藝館、新橋・新福亭、芝神谷町・勇多加亭、澁谷・澁谷亭、魚籃坂下白金・演藝館)

・明治45(1912)年6月16日は寄席案内23軒

この寄席案内広告に広告を出稿している寄席の軒数を見ると、案内広告の掲載が始まった明治42(1909)年4月1日の10軒から次第に増えて、明治45(1912)年の6月1日付では25軒までになっている。ここにある寄席の名前と所在地は、広告に表示されているものをそのまま書いている。ある時は漢字で、またある時はひらがなであったりする。ここには正式なものというよりも、当時の東京の人々による呼び方、書き方が、そのまま表れているのだろう。

4. 編集記事としての寄席案内

『都新聞』には広告だけでなく、編集記事としての寄席案内も掲載されていた。掲載の歴史としては広告としてよりも、記事の方がずっと古い。『都新聞』の寄席案内記事に登場する寄席の軒数について、地域と軒数を辿ってみると以下の表ようになる。

この時の『みやこ新聞』に最初の寄席案内記事が登場したのは、明治21(1888)年の11月18日だった。そこには、「各寄席に出席する藝人は左の如し」とある。なお、当時の新聞には、欄外に印刷されている案内記事もある。しかし、『都新聞』復刻版を見ると、欄外に印刷された部分は、かすれていたり、紙が擦り切れていたりして判読の難しいことが多い。このようなものは、ここでは数えていない。基本的に新聞紙面の枠内(罫線の内側)に印刷されたものの軒数である。

表1 寄席案内記事に掲載された各地域の寄席軒数

(単位:軒)

地域/ 年月日 (明治)	21(1888)年 11月18日	27(1894)年 1月16日	31(1898)年 1月18日	35(1902)年 1月30日	39(1906)年 1月16日	41(1908)年 1月16、17日	43(1910)年 2月16日	45(1912)年 1月3日
日本橋区	10	8	8	11	10	9	9	14
京橋区	4	4	6	11	8	11	8	12
神田区	6	12	8	17	12	10	9	10
芝区	8	8	9	16	12	9	11	13
浅草区	7	8	7	12	8	7	6	6
本所区	1	4	5	9	5	7	6	6
深川区	3	4	5	10	8	7	9	10

下谷区	2	4	5	10	6	7	7	5
牛込区	2	1	3	5	5	3	4	4
麹町区	3	2	5	4	2	2	2	2
麻布区	1	1	3	3	6	4	4	6
本郷区	2	3	2	5	3	3	5	5
小石川区	1	1	4	3	3	6	4	6
赤坂区	3		3	5	6	6	5	6
四谷区	1	2	4	2	3	5	2	2
新宿				1	1		2	2
中野				1			1	
王子				1	1	2		
千住		2	2	3	3	2	4	
品川			2		1	2	1	1
澁谷						2	1	3
荏原						1		
横浜			2	3	2	2	2	2
横須賀				1	1			1
八王子			1	1				
金澤				1				
船橋							1	
千葉			1	2	2	2	2	
計	54	64	85	137	108	109	105	116

表1は明治21(1888)年から明治45(1912)年までのデータである。この時代の寄席は月の前半が上席、後半が下席と呼ばれ、新聞の寄席案内も月に2回の掲載だった。

ここに掲載された軒数では、営業していた寄席の軒数が、明治21(1888)年11月18日の54軒から増えて行き、明治35(1902)1月30日の137軒が最も多く、明治45(1912)年1月3日の116軒という軒数の推移になっている。当時の東京市(15区)から新宿、品川、渋谷などの東京府へと拡がり、さらに横浜、千葉、横須賀などへ広がって行った様子が見られる。

この軒数の伸びと拡がり、寄席という演芸場の拡がりとも見られるが、他方では『都新聞』の読者の地域的な拡がりとも見られる。

5. 明治後期の東京の寄席軒数と入場者数は—警視庁統計書から

明治31(1898)年から明治45(1912)年にかけての東京の寄席軒数、年間の入場者数、年間の興行日数と興行日1日当りの平均入場者数が表2である。

表 2 寄席営業数(軒数)、年間入場者数、興行日1日当りの平均入場者数

年	営業者 軒数	入場者数		年間興行日数と1日平均入場者数			
		昼興行(人)	夜興行(人)	昼興行(日、人)		夜興行(日、人)	
明治 31(1898)年	168	1,138,927	3,954,655	17,589	64	47,531	83
明治 33(1900)年	176	852,401	4,267,324	12,678	67	45,787	93
明治 35(1902)年	156	628,798	3,550,421	10,841	58	43,293	82
明治 37(1904)年	151	445,514	3,058,358	9,921	45	42,189	72
明治 39(1906)年	157	562,146	3,749,085	10,643	53	42,699	89
明治 41(1908)年	174	564,250	4,320,528	9,753	58	45,340	95
明治 43(1910)年	193	442,157	3,658,141	9,179	48	46,821	78
明治 45(1912)年	184	331,409	3,256,349	8,088	41	43,894	74

*この数字(営業数、年間入場者数)は東京の市部(神田、日本橋、京橋、麹町、芝、麻布、四谷、小石川、本郷、下谷、浅草、深川など)と、東京府郡部(品川、新宿、板橋、千住、八王子、府中、青梅など)の数を合計したものの

表 3 寄席営業数(軒数)、東京市内と郡部の推移(警視庁統計書から)

(単位:軒)

年	地域	東京市部(軒)	東京郡部(軒)	合計(軒)
	明治 33(1900)年		157	19
明治 35(1902)年		144	12	156
明治 38(1905)年		134	17	151
明治 39(1906)年		136	21	157
明治 43(1910)年		165	28	193
明治 45(1912)年		149	35	184

明治 31(1898)年以降の推移を表で見ると、全体として東京の寄席軒数は増加傾向である。だが、東京市部においては増減の波はあるものの、寄席の軒数は減少している。これに対して品川、新宿、板橋、千住、八王子、青梅など郡部では明らかに増加傾向がある(表 3)。これは、東京全体の人口の増加とともに、東京における居住区域の広がりをうかがわせ、日常生活の中で、人々が地元での楽しみを求める姿が、寄席の軒数の増加となっていると考えられる。

表 2 の年間興行日数を見ると、明治後半期の寄席は昼興行から夜興行に中心が移って行ったようだ。明治 31(1898)年の年間昼興行 17,589 日が、明治 45(1912)年には 8,088 日まで減っている。これに対して、夜興行は明治 31(1898)年の年間 47,531 日が、増減の波はあるものの、明治 45(1912)年は 43,894 日となっていて、比較的小幅な減少である。

これは、人々の生活時間の変化、昼間に働いて夜は休息という仕事に就く人が増えてきたことの表れ、と考えていいのではなかろうか。

小木新造は前掲の「東京庶民生活史研究」の中で、『東京府統計書』を基にして、商業・

工業農業人口の比較している。それによると、明治 15(1882)年から明治 21(1888)年にかけては、地域による違いはあるものの、全体としては、商業人口はやや減少、工業人口は商業人口より減少幅が大きく、農業人口においては約 20%へと激減している。だがその後、明治 33(1900)年には、明治 21(1888)年に比べて商業人口は 3 倍強に、工業人口は 2.5 倍と、ともに大きく伸びている。

さらに、『警視庁統計書』の「職工累年比較」によると、工場で働く人々の数が倍増しており、賃金労働者の増加がわかる。明治中期から後期にかけて、手工業的職人仕事から近代的機械工業まで含め、東京における生産活動は大きく変化したのである。

明治後期の東京では、職住分離が進み、賃金労働者が増え、定期的に休日を取れる人もしだいに増えて来た。

では、寄席の年間入場者数はどうだろうか。表 2 にあるように、昼興行の入場者数は大きく減少したが、夜興行では大きな減少にはなっていない。同様に、興行 1 日当りの平均入場者数では、昼興行では大きく減少していて、夜興行も昼興行程ではないが、減少傾向が見られる。年間興行日数の推移と重ね併せて考えると、寄席の経営は決して楽なものではなかったものと思われる。しかし、寄席は我が町にある身近な娯楽として、地域の人々を中心にして支えられ、成り立っていたのだろう。

6. 『都新聞』の発行部数、購読料、広告掲載料金は

警視庁統計書にある日刊新聞の配布部数から推計すると、明治 26(1893)年から 32(1899)年にかけての 1 日あたりの配布部数はおおよそ 35,000 部であった。また、東京府と他府県の部数を比較すると、『都新聞』は東京府民が中心的な読者であったことが数字に表れている。このことは紙面作りにおいても強く意識されていたのではなかろうか。

この後の 1 日あたり発行部数については、明治 36(1903)年は 45,000 部と『二六新報』(同年 11 月 26 日付)が報じ、明治 37(1904)年は 60,000 部と『広告大福帳』(同年 10 月 20 日付)が伝え、明治 44(1911)年は 50,000~70,000 部と『国民雑誌』(同年 4 月発行)が書いている。これらの数字から、明治後半から末期にかけて『都新聞』の発行部数は少しずつ増えていったと考えてよいのだろう。

購読料を見ると、明治 17(1884)年 9 月の『今日新聞』としての創刊時は、1 枚 1 銭、1 か月前金 20 銭、明治 21(1888)年 11 月に『みやこ新聞』へ改題して、1 枚 1 銭 5 厘、1 か月前金 30 銭に、さらに明治 22(1889)年 2 月に『都新聞』へ改題して、1 枚 1 銭、1 か月前金 25 銭とした。また、明治 23(1890)年 12 月には、1 枚 1 銭 5 厘、1 か月前金 30 銭に、明治 33(1900)年 2 月以降は 1 か月前金 35 銭、3 か月前金 1 円と表記している。購読料も少しずつ値上がりしている。ほかに当時は府外郵税が必要だった。

広告掲載の基本料金は、明治 17(1884)年 9 月の『今日新聞』としての創刊時は、1 行 22 字詰 1 日 7 銭、明治 21(1888)年 11 月に『みやこ新聞』へ改題して、1 行~10 行まで 1 日分 1 行 10 銭、『都新聞』に改題した後の明治 25(1892)年 1 月の紙面では、1 行 5 号活字 21 字詰 1 行 1 日 11 銭とあり、明治 33(1900)年 2 月には 1 行 5 号活字 22 字詰 1 行 1 回 30 銭、

明治 43(1910)年 1 月には 1 行 5 号活字 18 字詰 1 行 1 回 50 銭とある。これを見ると、広告掲載の基本料金は購読料よりも早いペースで値上げが進んでいた。このことは、広告効果に対する一定の評価があったものと思われる。

7. 各町内に一軒、日々の暮らしの楽しみ

明治の東京、どんな人がどのように寄席に通いを楽しんだのだろうか。今も新宿にある寄席「末廣亭」の席主であった北村銀次郎氏への聞き書きがある。明治 23(1890)年、東京四谷筆筈町生まれ、本人は大工の倅だと言い、明治、大正、昭和の三代を、職人の世界と芸人の世界を生涯を通じて歩んだ人である。

「とにかく、明治は寄席が多かったよ。増減が激しいから簡単には言えないけど、明治の 30 年代で二百以上、少ないときでも百数十はあったはずだ。落語寄席ばかりじゃない、講談専門、義太夫専門、浪曲専門の寄席と、それぞれが独自の寄席を持っていた。むしろ、落語の寄席、俗にいう色物寄席の方が少なかったくらいだ。」

「ところが、経営が実に不安定だ。なにかあると、ガタッと減ったり、また反動で増えたりした。明治の三十年代で百数十軒と言っても、二百数十軒と言っても、あたっている。二、三年で数十軒の変動なんて普通なんだもの。また、寄席といっても今の寄席（新宿末広亭など）を思い浮かべちゃいけない。一流は別だけど、端席と言って定席じゃない二流、三流の寄席なんか、ほとんど百人も入れれば満員っていう程度。大体がおやじとおかみさんでやってたんだから。だって路地奥の長屋を二軒もぶっ壊せばやれたんだもの。」⁵⁾

北村氏によれば、子供の時分の寄席の木戸銭は定席で 5、6 銭、たぶん端席は 3、4 銭で、だいたい盛蕎麦二杯分くらい。これが明治の終わり頃になると、定席が 10 銭、二流どころで 7、8 銭だったという。

「明治の東京は、本当に職人が多かったよ。3、4 人にひとりには職人だったもの。職人と呼ばれる業種自体が多かったんだよ。（中略）こういう職人、物売り、それに商家の連中が家族連れなんかで、夜になると寄席に遊びに行ってたわけなんだ。」⁶⁾

寄席以外の楽しみは芝居小屋だった。しかし、これは昼間からだから、そう簡単には行けない。寄席に比べれば時間が長い。職人たちは休日以外には行けない。木戸銭も寄席に比べれば高かった。北村氏は、芝居通ってというのは、居職の人が多かった。立ち見席に陣取って声をかけるのは、みんなそういう人だったという。

しかし、寄席においても、娘義太夫、その後の娘手踊り芝居、安来節など、流行の変化が著しく、明治の末から大正にかけては寄席の受難時代と言われ、ついには関東大震災で東京の寄席の多くがつぶれてしまう。

8. まとめ

寄席は明治の東京人の楽しみとして、手軽で身近なものだった。寄席の芸人は、この時代に働き、また寄席に通った多くの職人たちの腕を磨く技にも似て、客によって育てられ

たのだろう。そこでは、時には辛口の評判を受けたり、また他方では、鼻眞の芸人もうまれたりした筈である。新聞の寄席案内には、出演する芸人の名前が掲載されていた。これは、芸人同士の刺激になると同時に励みにもなったに違いない。

明治は人々の職業も多様化が進んだ時代だった。モノ作りも工場による生産が始まり、流通や販売、管理の仕事も社会に広がって行った。個人の技能が仕事に大きく映し出される職人たちに、販売や管理などの商取引や事務を仕事とする人々が寄席の客に加わっていたのである。そこでは、寄席に求めるもの、笑いのタイプにも違いが生まれ、それを芸人も感じ取った可能性がある。

職場と住まいが分かれ、朝晩の通勤があり、定期的に休みが取れる賃金労働者が増えて行った。そこでは、出し物の種類も増えて、寄席も町内での娯楽から、もうひと回り広い地域の娯楽へと広がりが出てきたのだろう。そこに新聞メディアを通じて読者に寄席案内を伝える意味も生まれていたと考えられるのである。

註

- 1) 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、1981）p.205
- 2) 桂米朝『落語と私』（文春文庫、1986）p.115
- 3) 前掲書『落語と私』pp.123～124
- 4) 小木新造『東京庶民生活史研究』（日本放送出版協会、1979）p.406
- 5) 富田均『続・聞き書き 寄席末広亭』（平凡社、2001）p.44
- 6) 前掲書『続・聞き書き 寄席末広亭』p.50

参考資料

- 土方正巳『都新聞史』（日本図書センター、1991）
 『都新聞』復刻版（柏書房、1994）
 『警視庁統計書』（クレス出版、1997）